

写真で紹介する  
古墳群のデータ  
十数基が集まる  
貴重な資料  
屈指の規模の横穴式石室と  
数々の出土品



# 巨大石室墳を掘る

— 兵庫県のと真ん中にある東山古墳群の調査概要報告 —



# 東山古墳群とは

兵庫県のほぼ中心、多可郡中町東山に東山古墳群は位置します。標高692.6mの妙見山の麓にあり、中町の北部平野を見おろす立地にあります。この古墳群が築かれた7世紀という時代は、聖徳太子の登場、大化改新、律令の制定、藤原京の造営というように、めまぐるしく世の中が変化した時代であり、大きな古墳が次第に作られなくなった時代です。その中であって、東山古墳群では兵庫県下でも最大級の横穴式石室をもつ1号墳をはじめ、巨石をもちいた石室が次々と作られました。当時の豪族の力が偲ばれるとともに、新しい時代の幕開けにともない、豪族たちがどのようにふるまったかを教えてくれる貴重な遺跡といえることができます。この古墳群に対する史跡整備の一環として、平成8年度より発掘調査をおこなってきました。その成果は、この地域の歴史を考える上だけでなく、時代の変化を探る上での重要な資料として注目を集めています。



▼ 東山古墳群遠景（中央の山が妙見山、その麓の校舎が多可高校、古墳群はそのすぐ左隣り）



## 目次

### 目次

1	東山古墳群とは	1
2	東山1号墳	8
3	東山2号墳	16
4	東山3号墳	18
5	東山10号墳	20
6	東山12号墳	24
7	東山13号墳	30
8	東山15号墳	34
9	その他の古墳	40
10	東山古墳群の成果から	42

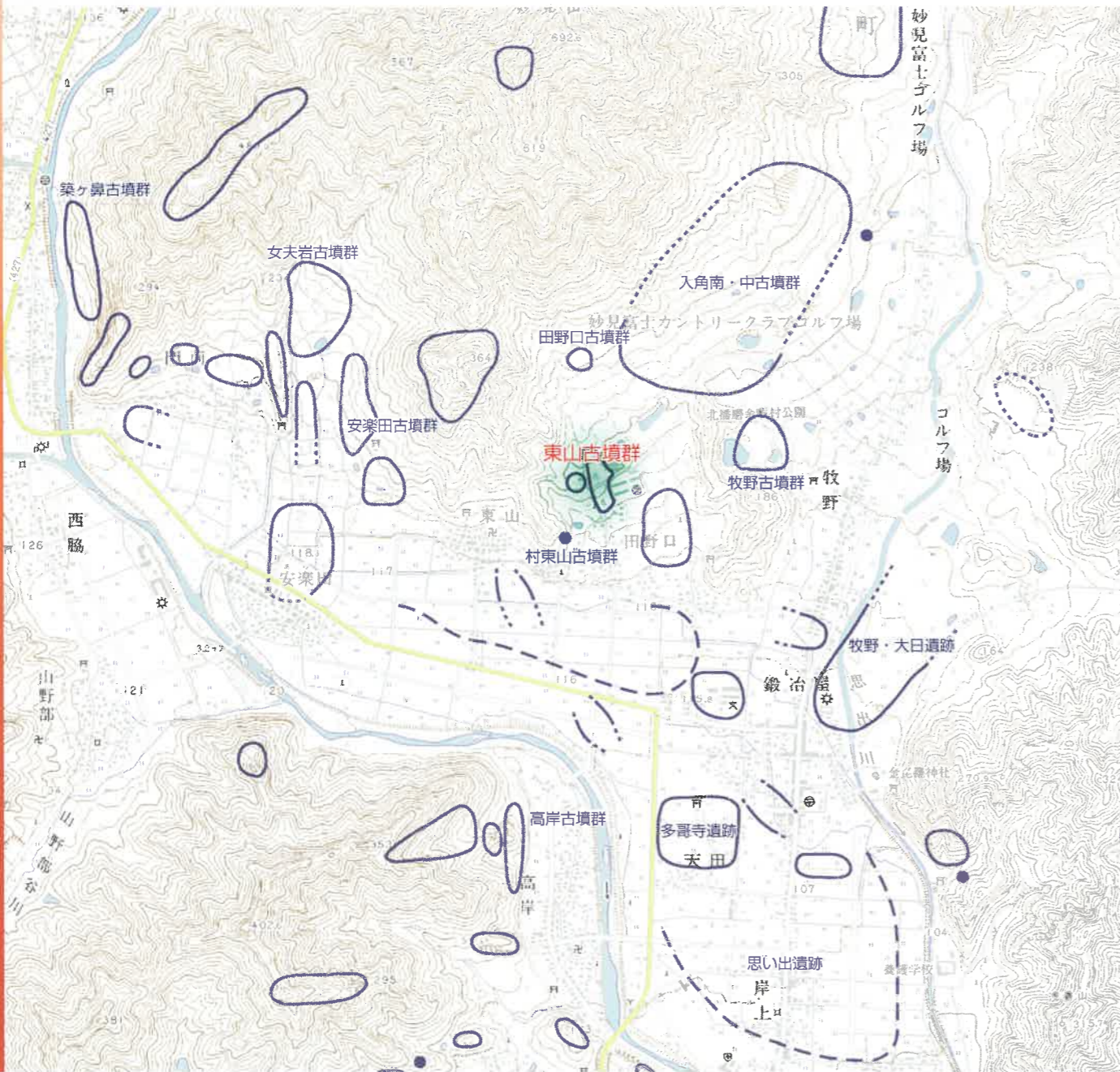
### 例言

- ◇本書は平成8年度から11年度にかけておこなわれた東山古墳群の発掘調査の成果を解説する冊子である。
- ◇調査成果の詳細については『東山古墳群Ⅰ』（平成11年刊行）と『東山古墳群Ⅱ』（平成13年刊行予定）を参照されたい。
- ◇本書の編集・執筆は菱田哲郎（京都府立大学）がおこない、宮原文隆（中町教育委員会）が補佐した。
- ◇本書のブックデザイン、およびイラストの作成は小東憲朗氏による。
- ◇表紙のイラストは12号墳の陶棺設置状況の復原図、裏表紙の左上は完成間もない1号墳周辺を描いたイラスト。

### 妙見山麓の古墳群

妙見山の麓はたくさんの古墳が築かれた場所として知られています。その総数はおよそ200基にのぼると見られています。その大半は横穴式石室を主体とするもので、古墳時代後期から飛鳥時代に築かれたと考えられます。それ以前の古墳はほとんどなく、中町全体でも後期古墳の数が突出していることが指摘できます。この地域の開発が古墳時代後期になって急速に進んだことを示していると考えられますが、その原因についてはまだ未解明です。

▼ 東山古墳群と周辺の遺跡



東山古墳群とは

### 安楽田・女夫岩古墳群

妙見山西方山に位置する安楽田・女夫岩古墳群は16基によって構成されています。このうち1・2号墳が発掘調査され、ここでは横穴式石室内に板状の石材を組み合わせた箱式石棺が次々と作りつけられていることがわかりました。

### 村東山古墳の家形石棺

1973年、山裾を削る工事中に村東山古墳は発見されました。この古墳の石室内には、非常に丁寧なつくりの凝灰岩製の組合せ式家形石棺が納められていました。村東山古墳は東山古墳群から谷筋を挟んだ南西約150mの山裾に位置し、東山古墳群との関連が注目されます。この家形石棺は1977年に兵庫県指定重要有形文化財の指定を受け、中町中央公民館に保存・展示されています。



## 東山古墳群の分布

東山古墳群は妙見山から延びる低い尾根上に位置し、全部で16基を数えます。このうち4基はやや北に離れており（北群）、他の12基がまとまった一群（南群）をなしています。北群の4基は直径15m程度の円墳であり、規模が均質なのに対し、南群は直径15m前後の円墳から直径30m前後の1号墳や15号墳までバラエティーに富んでいます。これら南群の古墳について調査をおこないました。南群の古墳のうち1号墳、2号墳、10号墳、11号墳、13号墳、14号墳、15号墳は入口が開いており、南あるいは南東方向に入口を向けています。天井が架かった状態の古墳、とりわけ巨石を用いた石室がこれだけまとまって見られるのはたいへん貴重な例と言えます。



▲ 調査前写真撮影風景

東山古墳群一覧

古墳	墳形	規模	埋葬主体	開口方向	石室全長	備考
1号墳	円墳	経約30m	左片袖式横穴式石室	南	12.5m	96年調査
2号墳	円墳	経約15m	右片袖式横穴式石室	南	9.3m	96年調査
3号墳	円墳	経約15m	右片袖式横穴式石室	南	8.6m	96年調査
4号墳	円墳	経約15m	横穴式石室	南	——	96年墳丘調査
5号墳	円墳	経約15m	横穴式石室	南?	——	(北群)
6号墳	円墳	経約15m	横穴式石室	南?	——	(北群)
7号墳	円墳	経約15m	横穴式石室	南?	——	(北群)
8号墳	円墳	経約15m	横穴式石室	南?	——	(北群)
9号墳	円墳	経約18m	両袖式?横穴式石室	南	(9.0m)	98年調査
10号墳	円墳	経約20m	両袖式横穴式石室	南東	(12.7m)	96・98年調査
11号墳	円墳	経約18m	横穴式石室	南東	9.6m	99年調査
12号墳	円墳	経約22m	無袖式?横穴式石室	南	11.5m	97~99年調査
13号墳	円墳	経約15m	右片袖式横穴式石室	南東	8.2m	97年調査
14号墳	円墳	経約18m	横穴式石室	南東	9.1~9.4m	99年調査
15号墳	円墳	経約25m	両袖式横穴式石室	南東	12.4m	97年調査
16号墳	円墳	経約15m	横穴式石室	南東	——	99年墳丘調査

※ ( ) 内は復原値



## 古墳調査の進め方

発掘調査は掘削したり遺物を取り上げたりするだけでなく、綿密な記録を取る必要があります。一般に、土がどのように堆積したかがわかるように断面層位図を作成して、掘削を進めていきますが、東山古墳群では、最初の埋葬と追葬時の面、また中世に再利用された面などを確認することができました。また、遺物については、一つ一つのものについて見つかった場所を記録して取り上げていきました。とくに石室の中では、腐ってしまった木棺の位置を推定するのに、鉄釘や耳環（耳飾り）などの出土状況が大いに役立ちました。発掘調査の終了後も、遺物の接合や実測など、整理作業が続きます。その際、すいぶん離れた場所から出土した遺物が接合することがあり、たとえば10号墳と12号墳から出土した須恵器の甕片が接合するなど、興味深い事実が浮かび上がっています。



## 現地説明会

発掘調査の成果を現地で見ていただくために、現地説明会を開催しました。毎年、調査のたびに説明会をおこないましたところ、常に200名を超える方々が東山古墳群を訪れました。地元はもちろん、遠くからも見学に来られた方も多数おられ、関心の高さがうかがえました。



## 遺物の検出作業

写真や図面の記録をとるため、見つかった遺物をそのまま残しながら掘削を進めています。



## 土層断面

1号墳の開口部の断面です。天井石の端の位置をピークとして石室内部に向かって土が流入している様子がわかります。



## 遺物の実測作業

画板の上に方眼紙をのせ、10分の1の縮尺で図面を描いています。1号墳のように多くの遺物が出土した古墳では、この作業が何日も続きます。



# 東山1号墳

東山古墳群の中で、最大かつ最古の古墳です。墳丘の直径は約30m、裾にテラスがあり、墳丘のまわりには周溝がめぐっていましたが、墳丘は頂部が丸く、半球を伏せた形であったことがわかります。このことは中期までの古墳が頂部を平らに作ることに対照的で、東山古墳群の時期には古墳の上に登ることがないと言えます。



▲ 調査開始のころ

## 1号墳の復原図

1号墳の墳丘はほとんどが盛土で作られていました。調査の結果を参考にして、埋葬当時の姿を復原してみました。



## 調査前の1号墳

調査前の石室の入口はかなり土砂で埋まっていたようですが、中はかなり広々とした空洞の状態でした。



## 1号墳の背後

地表面の起伏から周溝がめぐっていることがわかります。こちら側に関しては、盛土の流出が少なかったことがよくわかります。



## ▼ 調査完了時の1号墳



## 1号墳の石室

奥から見て左側に袖のある左片袖式の横穴式石室です。全長は12.5mもあります。袖から奥を玄室、手前を羨道と呼びますが、玄室は幅が2.8m、高さ3.25mもあり、そのために巨大な天井石を用いています。

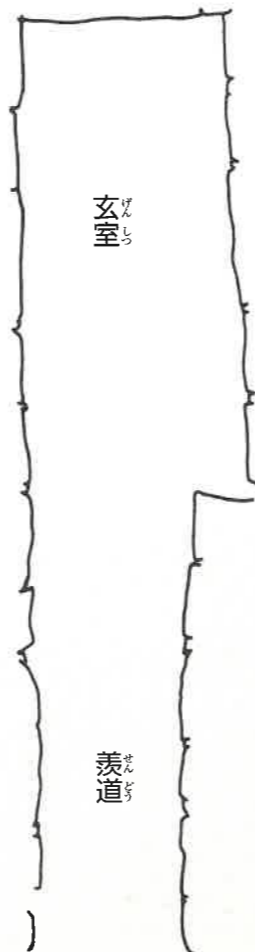
## 石室の入口

一番手前の段差は後世にできたもので、あるいは地震などによるのかもしれませんが。



## 石室の形態

1号墳の石室は、長方形の玄室に幅の広い羨道がつく形態をとっており、玄室と羨道の長さがともに6.25mで、1対1の比で設計されていることがわかります。



## 石室の床面

床面には拳大の川原石を敷きつめていました。平らな面が揃うように、かなり丁寧に幾重にも敷かれていました。石室は奥から手前にかけて傾斜がありますので、この敷石はちょうど排水の役割も果たしていたようです。そのためか、床面には排水溝はとくに作られてはいませんでした。



## 石室の袖

玄室から見て左側に立派な袖があることがわかります。この部分で天井もだいぶ低くなっていて、東山古墳群の中では古い特徴として指摘できます。



## 数々の副葬品

1号墳は古くから開口していたためか、内部はかなり荒らされていました。しかし、床面上からは数多くの遺物が出土しています。とくに羨道部は埋まってからほとんど荒らされておらず、部分的ではありますが埋葬当時の状況をとどめている場所もありました。出土遺物には耳環・玉などの装身具、武器や馬具、工具、そして須恵器、土師器などがあり、そのほかに中世や近世の再利用にともなう遺物も見つかっています。



### 羨道部の土器

羨道では多くの土器が出土しています。この下からも耳環などが出土しており、この部分にいく度となく副葬品が置かれたことを物語っています。

### 奥壁付近の遺物

奥壁の近くは後世の攪乱かくらんがあまり及ばなかったためか、遺物がまとまって出土しています。



### 矢束の副葬

羨道では鉄鏃てつそくがまとまって出土しています。このことからここに矢が束ねて置かれていたことが推定できます。矢筒やづつに入られていたのかもしれませんが。右は、ここから出土した鉄鏃の写真です。

### 飾られた武器

断片的な資料ですが、柄つかや鐺つばから装飾性豊かな大刀たちの存在もうかがえます。





## 入口の供え物

石室の入口には特別な意味があったらしく、閉塞施設が設けられたり、何らかのおまつりのあとが確認できることがあります。東山1号墳の石室入口部では、閉塞施設はありませんでしたが、ほぼ完全な形で須恵器が出土しました。高杯4個と提瓶2個（1個は破損）があり、酒のような液体を供える儀式がおこなわれたのかもしれません。



## 入口の須恵器

土器が供えられたのは、ちょうど敷石が途切れる位置であることがわかります。天井もここで終わりますので、本来はこの位置で閉塞をしていたと思われる。



## 供えられた高杯と提瓶

高杯のうち3個は本来は蓋の付く形式ですが、蓋は見つかっていません。これらの土器は、東山古墳群で出土した土器の中では最も古いものになります。



# 東山2号墳

2号墳は1号墳の東に位置する古墳で、石室の方位もほぼ揃うことから、同時に築造されたと考えられます。墳丘の直径が約15m、石室の全長も9.3mというように、1号墳よりもかなり小型であると言えます。石室は左片袖式の横穴式石室で、床面には敷石をもたないかわりに排水溝が設けられていました。この古墳の内部はかなり荒らされていて、出土遺物の量は多くはありません。

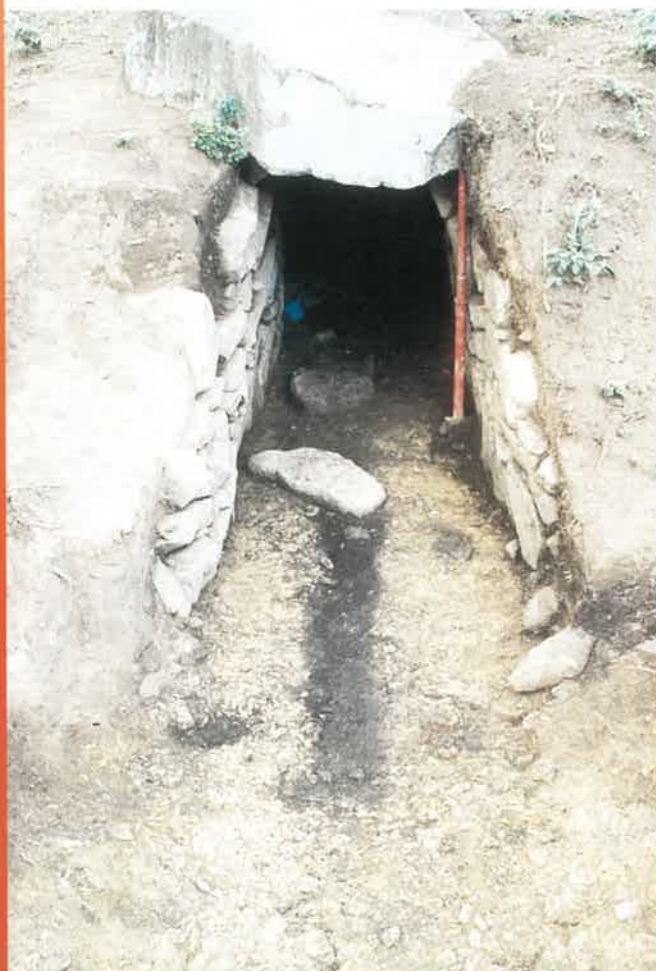


## 2号墳出土の耳環

2号墳の耳環は比較的大きいことが特徴です。東山古墳群は築かれた時代には耳環が次第に小さくなることが知られています。

## 床面の排水溝

排水溝は埋土が黒いため、簡単に見つけることができます。この中からも遺物が出土しています。



## 2号墳の石室

玄室の長さが4.3m、羨道の長さが5.0mであり、羨道がやや長い石室です。天井が比較的高く、奥壁を構成する石も4段に積まれているのが特徴です。



# 東山3号墳

2号墳の西北に隣接する古墳で、2号墳のあとに築かれたと考えられます。天井石が落ち、石室が埋まった状態でした。そのことが幸いし、中世の再利用ののちはほとんど荒らされなかったようです。



## 3号墳の石室

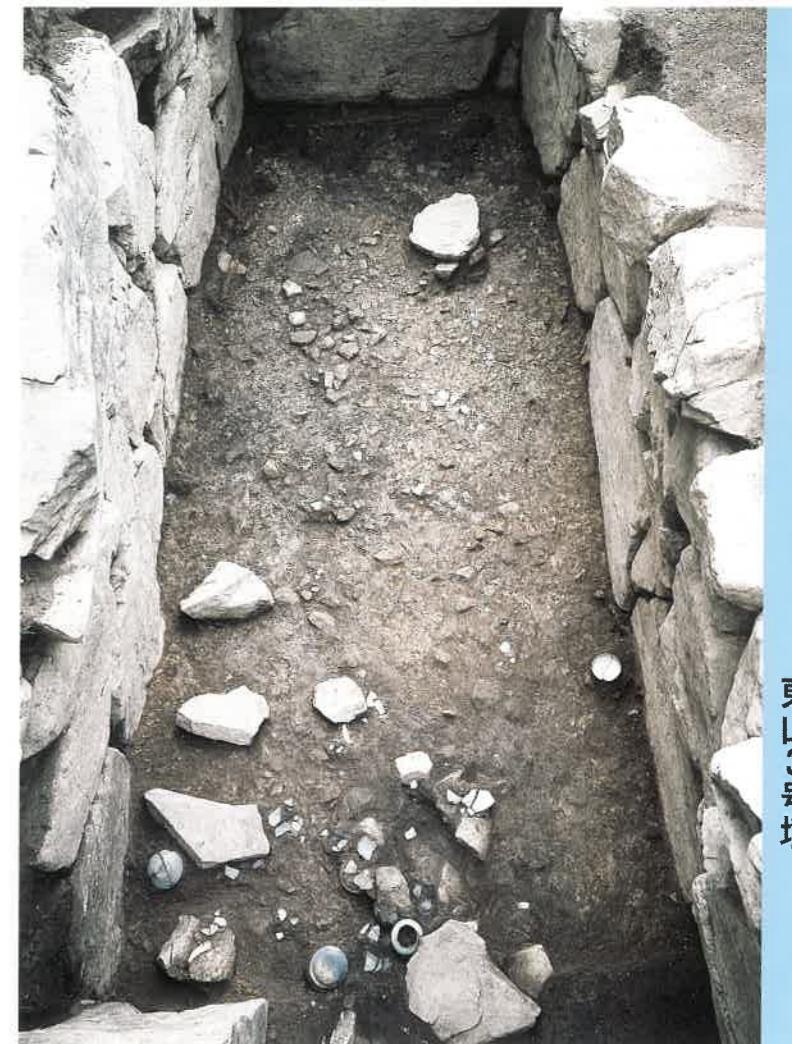
左片袖式の横穴式石室。全長が8.6m、玄室の長さが4.6mあります。床面は2号墳とほぼ同様で、排水溝が中央に設けられていました。

## 3号墳の副葬品

石室の玄室では副葬品が埋葬当時の状態をとどめて出土しました。とくに奥壁の近くでは壁に沿って大刀、小刀、鉄鏃が発見されています。土器は玄室の入口付近に数多くありました。



▲ 遺物を慎重に掘り出すところ



▼ 奥壁近くの副葬品



# 東山10号墳

10号墳は1号墳と15号墳の間にあり、時期的にもその中間に築かれたと考えられる古墳で、墳丘や石室の規模からみて、1号墳や15号墳にならぶ有力者の墓とみられます。墳丘が削られていることを利用して、その断面を観察した結果、古墳の築き方がわかる良好な情報が得られました。



▼ 10号墳の前庭部



## 墳丘の横断面

黒色と黄色の土を交互に積んで墳丘を築いています。そして天井石をくるむようにしっかりとした粘土でパックしたのちに、再び黒色土と黄色土の盛土がみられます。石室の構築と墳丘の盛土が密接な関係にあることがわかります。



## 墳丘横断面の剥ぎ取り作業

この横断面は墳丘の築き方がわかる好材料ですので、剥ぎ取りをおこなって展示できるように計画しました。接着剤を塗布したのちに布を貼っています。



## 墳丘横断面のパネル

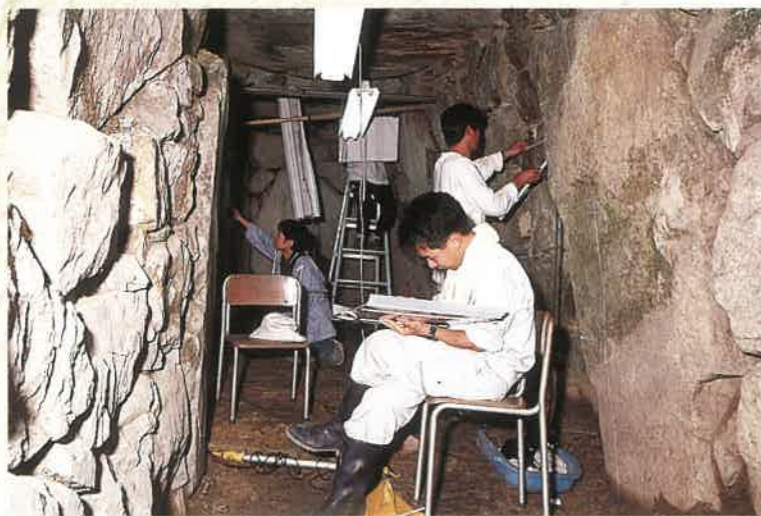
右下の写真はパネルに貼りつけて仕上げをしているところです。黒と黄色のコントラストが蘇りました。



▲これで完成！

## 10号墳の石室

両袖式りょうそくしきの石室ですが、袖の幅はわずかしがなく、かわりに床面に石を置いて段差を設けていました。壁面にはとくに大きな石を用いることが特徴的で、その間を小さい石で埋めるとい手法をとっています。奥壁も天井近くまで一枚の石で覆っています。



◀石室の美測風景



## 排水溝

10号墳は敷石しきいしをもつと同時に排水溝も設けられました。この排水溝は他の古墳の例と異なり、玄室げんしつの奥から片側の壁に沿って流れ、入口近くで中央に寄るとい形状でした。



## 床面の敷石

石室内部はかなり荒らされていましたが、わずかに敷石の残る部分がありました。平たい川原石を用いています。敷居状の石列を境に玄室げんしつと羨道せんどうに分けられてますが、羨道は1段低くなっていて、敷石も敷かれていませんでした。



# 東山12号墳

12号墳は石室が完全に埋もれてしまっており、発掘によってはじめて石室が露わになりました。開口方向はほぼ真南であり、他のいずれの古墳とも異なる方位です。石室にとりつく形で石垣状の施設が墳丘をめぐっています。それは、墳丘の盛土に覆われることから、石室構築時の施設で、完成時には人の目に触れなかったと考えられます。



調査前の12号墳 ▶

▼ 石室発見!



## 12号墳の前庭部

石室の前には何の施設も作られていません。墳丘の周囲をめぐる周溝も石室の前面にはまわってこないことがわかります。



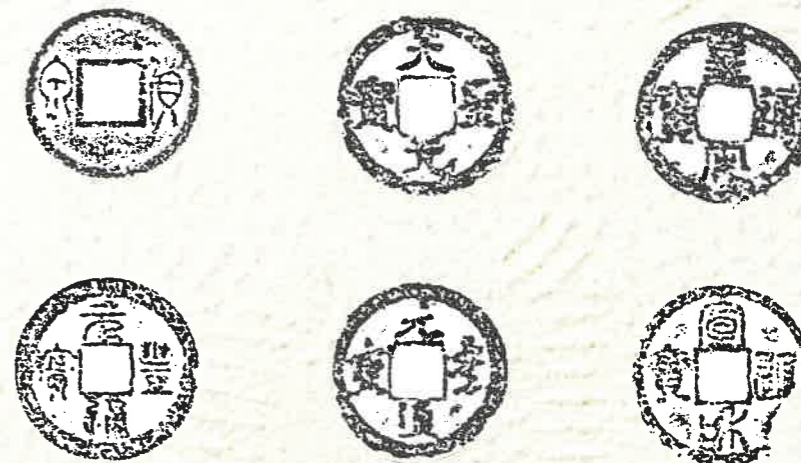
## 石室の入口

墳丘内の石垣状の列石とは別に、石室の延長上にも石がつづくことが看取できます。石垣状の列石は、まず石室の側壁から八字状に延び、その石を基礎に石室を取り囲むように築かれていました。



## 石室上層の埋葬

石室は完全に埋まっていたのですが、その埋土の中から人骨が出土しました。さらに6枚の古銭が出土し、六文銭と考えられることから中世の埋葬もあったことがわかりました。古銭はいずれも中国のもので、5枚が宋銭で、残り1枚は貨泉という1世紀代のものでした。



## 12号墳の石室

全長11.5mの大型の石室で、袖の有無はわかりませんが、床面に小石を敷きつめている部分が玄室にあたりと推測しています。そうすると無袖式ということになります。石の積み方が特徴的で、東山の他の古墳とは異なり、12号墳では羨道に1石だけ大きな石を立てる以外は比較的同じ大きさの石を用いて壁面を構成していて、小さな石ですき間を埋めるという手法は見られません。石室の方位も他の古墳とは揃わないこととあわせ、古墳群の中では異色の存在です。



### 組合せ式の石棺

12号墳の羨道には組合せ式の石棺が安置されていました。蓋は立派な一枚石で、側石も整った石を用いていました。この石棺を据えるために床面に粘土を貼っており、床面がかさ上げされた状態になっていました。この石棺より入口側には埋葬の痕跡はなく、これが最後の埋葬であると考えられます。

### 家形陶棺

12号墳の石室の一番奥に、石室と直交方向に陶棺が置かれていました。長さ140cm、幅45cmで、12本の脚が作りつけられていました。切妻風の屋根を模した表現であることから、一応「家形」と考えています。この蓋には2対の縄掛け突起があります。この陶棺の東側の小口には「目」字状の記号が刻まれ、反対側の小口には「×」が刻まれていました。



▲ 棺内の調査作業

# さまざまな棺

12号墳には石棺や陶棺のほかに木棺もあったと考えられます。というのは、埋葬にともなう耳飾り（耳環）や玉が比較的まとまって出土していること、あるいは木棺に使われた鉄釘が出土しているからです。12号墳は早くに天井石が落ちたために埋葬の状態をよくとどめていることがわかります。



## 豊富な玉類

木棺にともなう遺物の中でも玉類の豊富さが目を引きます。土製の小玉が圧倒的に多いのですが、ガラス管玉や水晶の切子玉、琥珀製の棗玉もありました。

▼ 陶棺の手前に木棺が想定できます。



## 陶棺の内部

陶棺の中には土が流入しており、人骨はかろうじて残存しているという状態でした。副葬品は刀子1本と須恵器の甕の破片だけで、耳環は付けていませんでした。



## 石棺の内部

石棺の中も土で埋まっており、人骨はほとんど残っていませんでした。ここでも刀子2本が副葬されていましたが、歯が集中する場所も2ヶ所あることから2体の埋葬があった可能性があります。耳環は1点のみ見つかっています。



## 石棺の底

遺骸の下には須恵器の甕の破片を敷きつめていました。その下には底石がありましたので、なぜ甕を敷いたのかは謎です。





# 東山13号墳

13号墳は、全長8.2mで、群中では最も小型の石室になります。奥壁がほぼ1枚の石で構成されることや玄室と羨道の天井の高さがほぼ等しいことなどが、新しい要素になります。床面には敷石はなく、排水溝が中央に設けられています。遺物の出土は少なかったのですが、耳環が6個出土しており（うち2組が一对）、繰り返し埋葬がおこなわれたことがわかります。



## 前庭部の排水溝

排水溝は玄室の入口近くからはじまり前庭部に流れてきます。遺物の出土状態から、築造後の早い段階に埋まり、追葬時には完全に埋まっていたことがわかりました。

◀ 調査前の13号墳



## 石室の内部

右片袖式の横穴式石室ですが、袖の幅はごくわずかになっています。袖石の反対側にも袖石と同じような石を立てていました。なお、奥壁には、10号墳や15号墳と同様、とても大きな石を用いています。



## 奥壁近くの箱形石棺

石室の一番奥に小型の箱式石棺が置かれていました。石棺といっても4枚の板石を組み合わせただけの粗末なもので、底石はありましたが、蓋石はありませんでした。内法で75×20cmをはかります。この種の石棺は加古川流域では一般的であり、とくに小型のものは7世紀後半に流行しています。



## 入口のまつり

13号墳の成果の中でも特筆すべき点は、石室入口で本来の状態をとどめた土器が見つかったことです。1号墳の場合と同じく、石室入口でまつりがおこなわれていたと考えられ、しかもそれが繰り返されていたことがわかりました。



## 据えられた平瓶

追葬時の面には平瓶が据えられていました。近くから杯身も出土していますので、一緒に供えられていた可能性があります。



▲ 石室内の発掘作業



## 平瓶の下から壺が出土

平瓶が据えられていた場所とほぼ同じ位置では最初の埋葬面でも土器が出土しました。今度は短頸壺と呼ばれる壺です。石室入口がまつりをおこなう場所として認識されていたことを物語っています。

## 須恵器平瓶と壺

平瓶は1号墳の入口で出土したような提瓶から変化した器形で、液体を入れる容器と考えられます。短頸壺も古墳ではよく見られる器形です。これらの容器には何を入れたのでしょうか。



# 東山15号墳

古墳群の中では一番南に位置し、集落からも近いので、地元の人々にもよく親しまれてきた古墳です。この古墳は、1号墳とほぼ規模をもち、墳丘の直径はおよそ25mあります。裾にはテラスや周溝がめぐっていましたが、盛土はかなり流出したらしく、その墳丘は1号墳ほど高くはありません。



▲ クレーンによる天井石の除去作業

## 調査前の石室

一番手前の天井石が破壊され、落ちた状態でした。石室の内部には簡単に入れるため、道具の置き場所あるいは子供の遊び場などになっていたようです。調査では、落ちた天井石を除去することから始めました。ちなみにこの石は5.3tをはかり、壊れた部分を計算に入れると、6tを超える重さであったと推測できます。



## 入口の状況

石室の入口には天井まで届く大きな石を立てていることが特徴です。ここに架かっていた天井石と合わせて、あたかも門のように見えたことでしょう。



## 15号墳の石室

両袖式の横穴式石室ですが、袖の幅はどちらもごくわずかです。全長は12.4mもありますが、玄室が4.4m、羨道が8.0mで、羨道が玄室の倍近くの長さをもっています。奥壁には高さが1.5m以上もある大きな石を用いています。



## 床面の敷石

床面には平たい川原石を敷き並べていました。入口近くの敷石ははがされていましたが、排水溝はありませんが、1号墳と同様、床面が奥から手前に向かってかなり傾斜しているので、敷石自身が暗渠の役割を果たしていたと考えられます。



## 木棺を復原する

15号墳は1号墳と同様、かなり荒らされていると考えられていましたが、<sup>げんしつ</sup> 玄室から<sup>せんどう</sup> 羨道にかけての部分でかなり良好な状態で遺物が出土しました。それらの情報から、2基の木棺を復原することが可能になりました。



▲ 姫路工業大学森永先生による焼土の調査

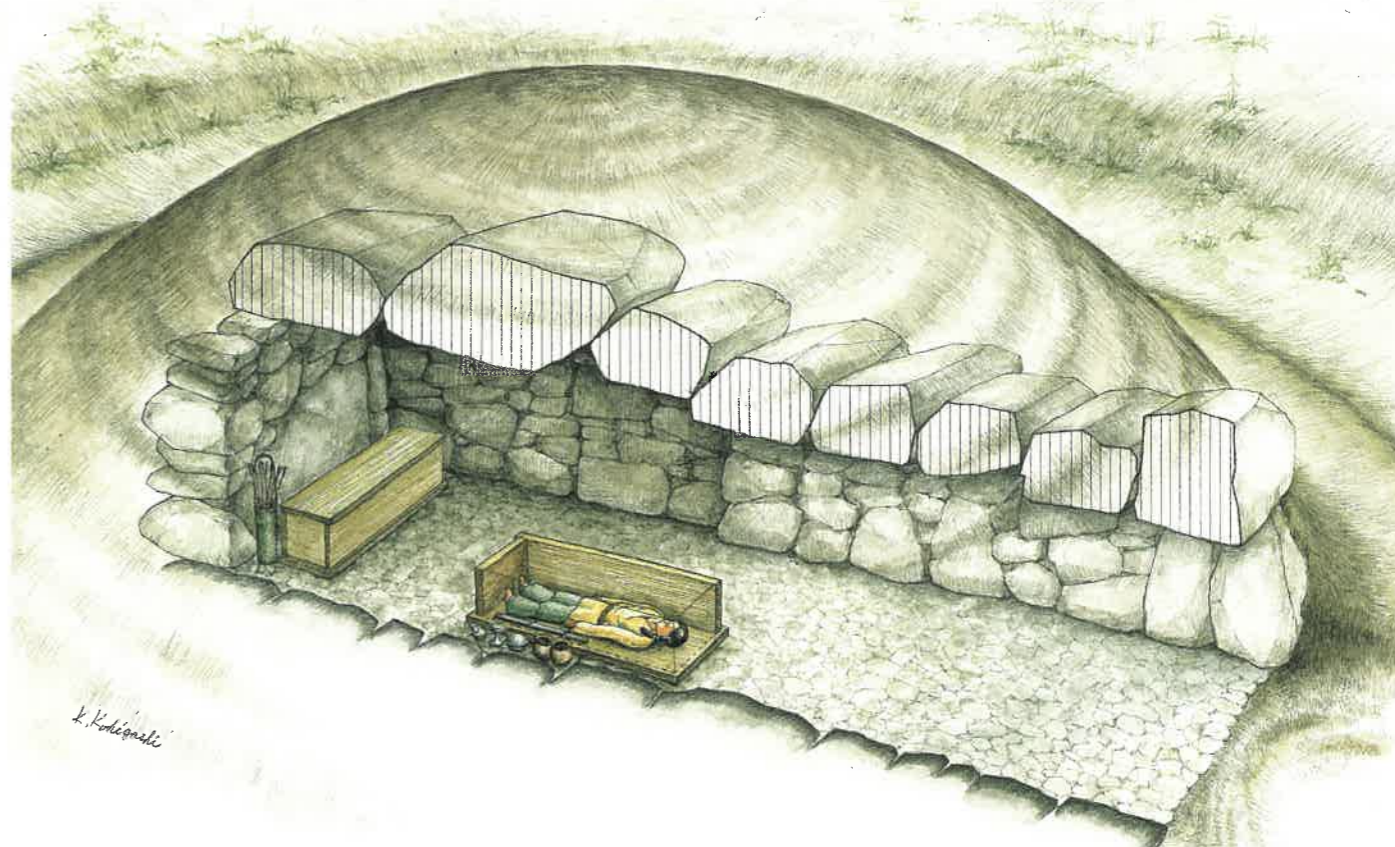
## 遺物の出土状況

石室の内部では遺物の出方にかなり偏りがありました。最も多量に出土したのが<sup>かたよ</sup> 袖近くの部分で、追葬時の木棺にともなうものと考えられます。一方、<sup>げんしつ</sup> 玄室の奥ではほとんど遺物が出土しませんでした。後世に荒らされたためとも考えられますが、追葬時にかなり徹底した片づけがおこなわれた可能性があります。

▼ 遺物の出土状況



▼ 遺物を取り上げた後の状況



▲ 木棺の復原（このほか羨道にもう1体の木棺があったと推定できました）

## 木棺の痕跡を探す

<sup>げんしつ</sup> 玄室と<sup>せんどう</sup> 羨道の境、すなわち<sup>そでいし</sup> 袖石のすぐ脇の部分では多量の土器片が出土しました。その土器片の散布状況と土の違いから木棺の痕跡を見つけることができました。この木棺内には柄を入口に向けて大刀が副葬されていました。



## 鉄釘の出土から

大刀を副葬する木棺とは別に、今度は<sup>せんどう</sup> 羨道の東側で鉄釘の散布から木棺を復原することができました。木は腐りやすく木棺そのものが見つかることは稀ですが、板材に打ち付けられた釘が残存して木棺の存在が浮かび上がってくるようになります。



## 大刀の副葬

15号墳では漆塗の大刀が埋葬時の状態で出土しています。全長56.9cmあり、柄は布を巻いた上に漆を張っており、柄の金具は鉄地銀張りでした。このような大刀は正倉院の黒漆塗りの大刀と関係づけられるものであり、新式の高級品と言えます。

## 大刀の出土状況

大刀は木棺の西側板に沿わせる形で棺内に副葬されていました。切先が奥を向いていますから、被葬者は入口に頭を向けることになり、実際、耳環も大刀よりも入口側で出土しています。遺骸が仰向けに置かれたとすると、大刀は左手の方に副えられていたこととなります。



## 大刀と土師器甕

大刀の周辺で出土した土器片は土師器の甕になりました。少なくとも3個体が棺の外側に副葬されていたと考えられます。このような甕は煮炊きに使われるものですが、それらが古墳に副葬される理由は何だったのでしょうか。



▲ 土師器 甕

▲ 漆塗大刀

# その他の古墳

これまで説明してきた古墳以外について、簡単に解説しておきます。調査では、4号墳と16号墳については墳丘を確認するためだけの調査をおこない、9号墳は全壊してしまった石室を推定するための調査をおこなっています。11号墳と14号墳は天井石をもつ古墳でしたが、前庭部を中心に調査を一部にとどめ、現在の姿を残していくことにしました。



▲前庭部の計測作業

## 東山11号墳

11号墳は15号墳とほぼ同じ方位をとる古墳です。石室の全長は9.6m、敷石はもたず排水溝がありました。これらのことから13号墳と似た性格が考えられます。前庭部を調査したところ、周溝が石室の入口に向かってまわりこむ状況が確認できました。



## 11号墳の遺物出土状況

石室前面の排水溝の埋土やその上層から多量の遺物が出土しました。鉄鍬などの鉄器も含まれ、石室の内部から引き出されたものでないかと推測しています。



## 東山9号墳

9号墳は石材が抜き取られ、石室がすっかり破壊された古墳です。しかし、調査をおこなってみますと石材を据えた痕跡を見つけることができ、およそですが石室の推定ができるようになりました。その規模は全長9m程度で、3号墳と同じ向きに石室が作られていたと推定しています。



## 東山14号墳

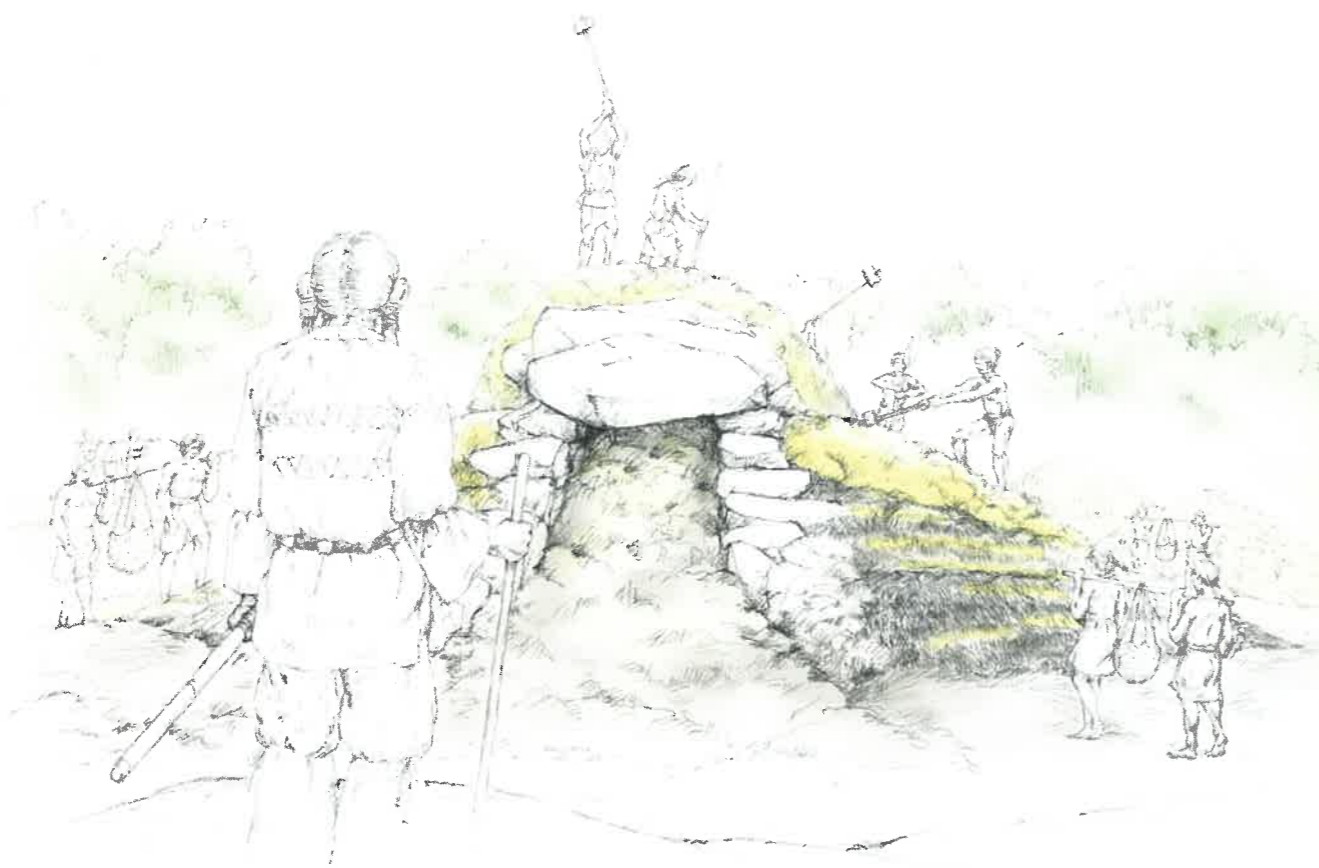
14号墳は15号墳の東に隣接する古墳です。墳丘と前庭部を調査しました。その結果、7世紀後半の土器が出土したため、この古墳群の中では最後に築かれた古墳であることがわかりました。



# 東山古墳群の成果から

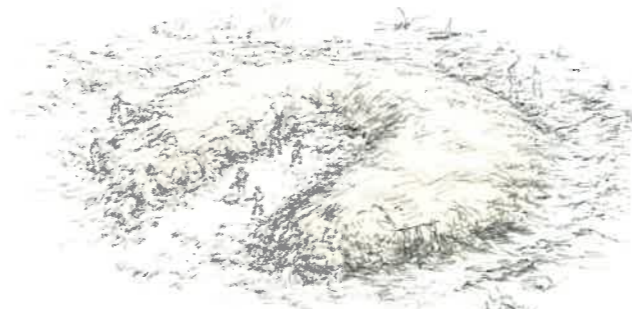
## 古墳の築き方がわかる

東山古墳群の墳丘はいずれも盛土によって造られていますが、その盛土が黒色土と黄色粘土であるので、その積み方が見分けやすいという特徴があります。そして10号墳では石室を横断するように墳丘の土層が確認できたので、石室の築き方と墳丘の盛土の仕方の関係がよくわかる成果が得られました。その成果をもとに、想像を交えながら古墳の築き方を復原してみると右の図のようになります。盛土の中でも天井石を包み込む粘土層が最も堅くしまっていましたので、この段階で入念に墳丘が整えられたと考えられます。それより上層の土は簡単に積まれており、東山古墳群内の多くの古墳では流出してしまったと推測できます。

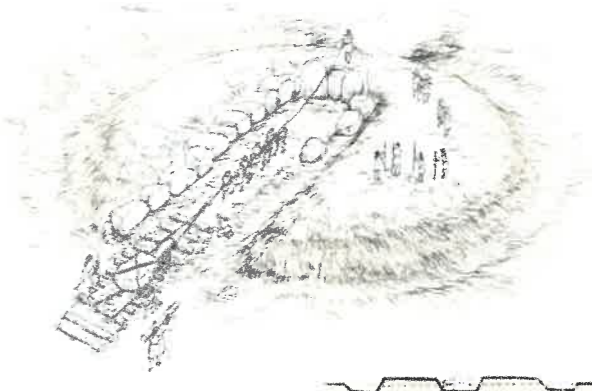


## 10号墳の築き方 (想定図)

①周囲を焼き払い墳丘の規模を確定して地山を掘る。



②基本となる平面を整える。石室を作り始める。



③石室の側壁を積み上げると同時に墳丘中段を作り上げる。



④天井石をのせたあと粘土で石を固める。



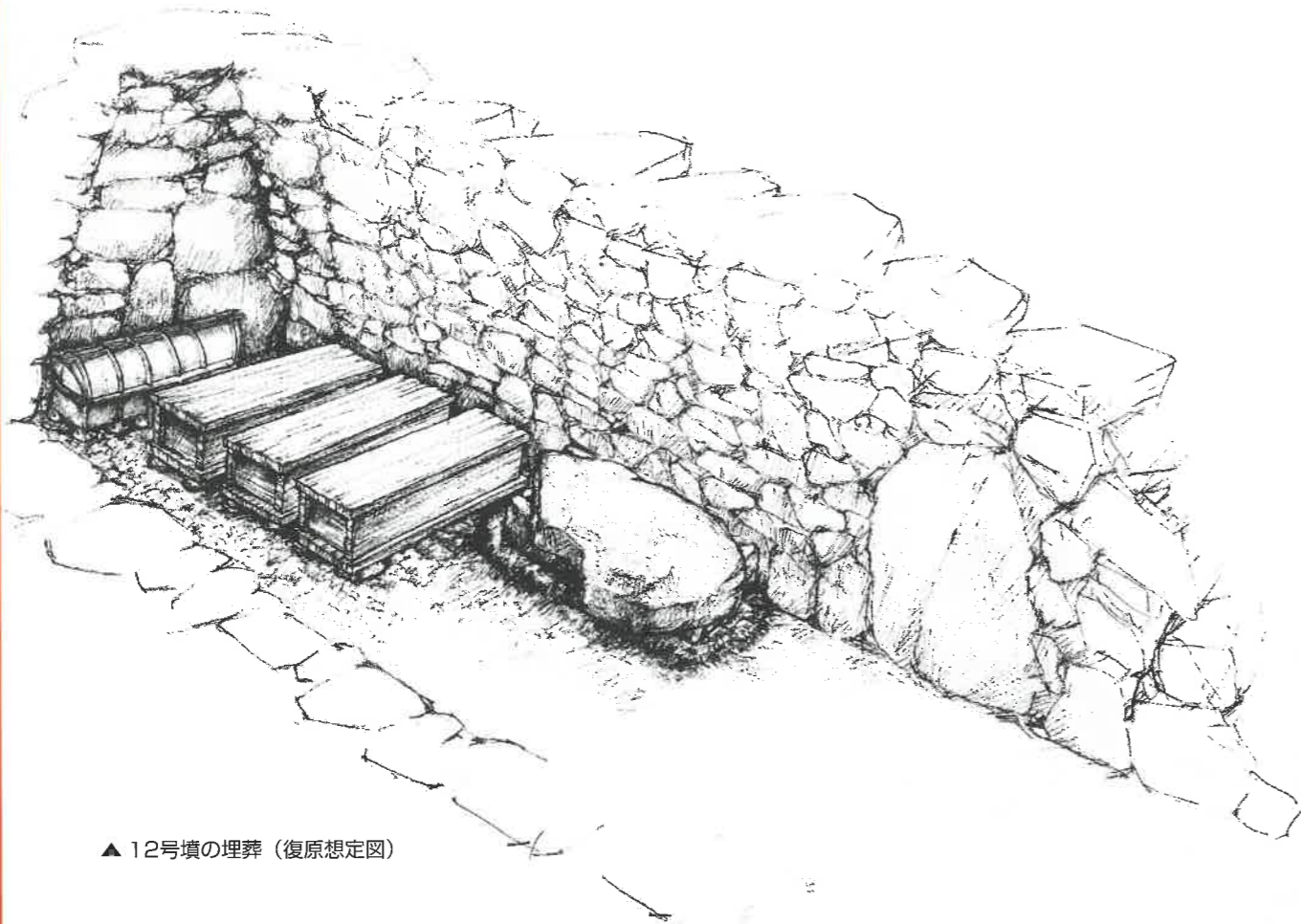
⑤これで完成!



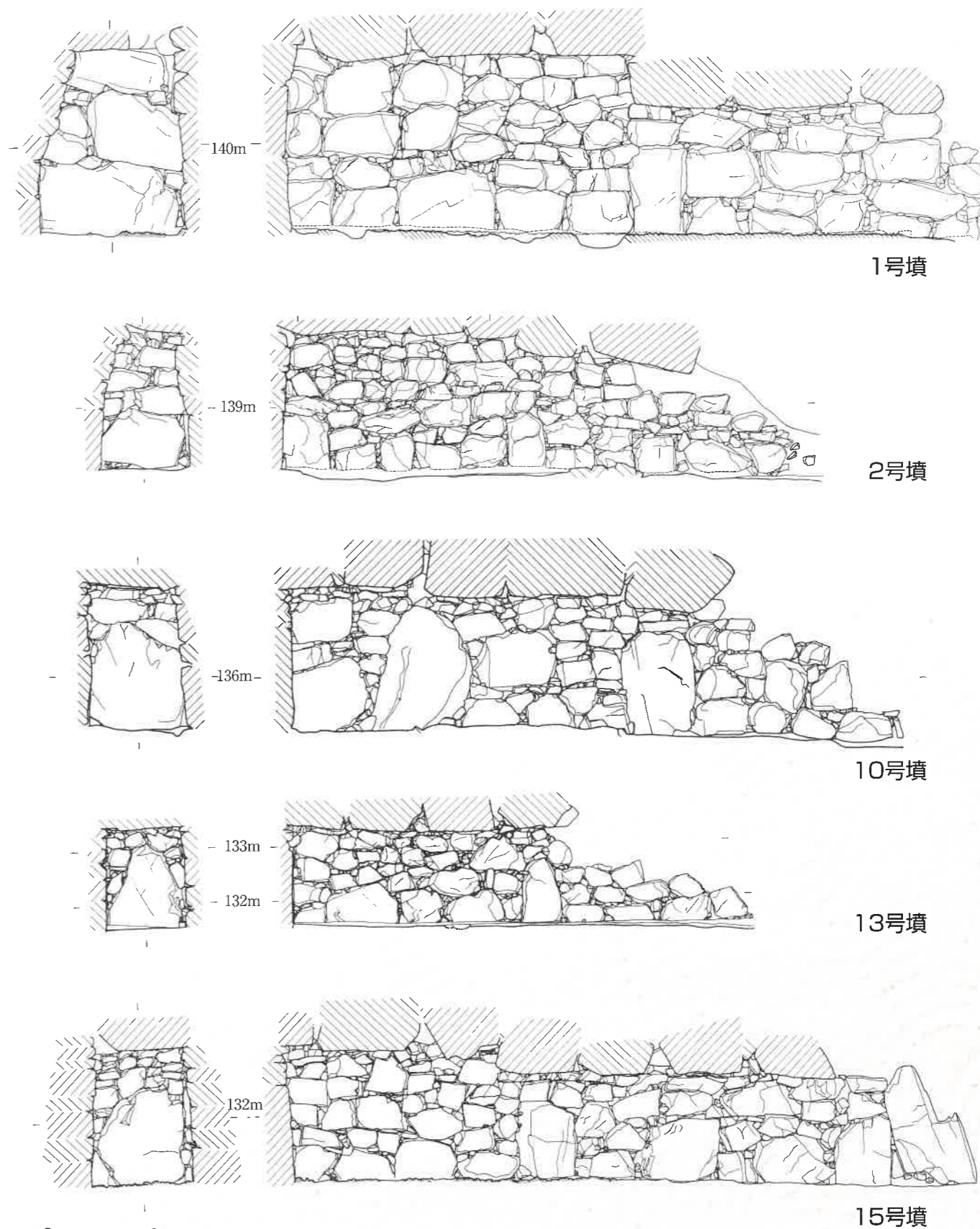
10号墳の石室と墳丘 ▶

### 石室の変遷を追う

東山古墳群ではまとまった数の石室を調査しましたので、その変遷を知ることができました。最も古い1号墳は天井が高く、玄室と羨道の高さの差も大きいのですが、次第にこの差がなくなっていくことがわかります。玄室と羨道の差がなくなっていくという点では、幅についても言うことができます。一方、奥壁では次第に大きな石を用いるようになり、13号墳や15号墳では1枚の石でほとんど覆うようになっています。このような一般的な変化とは別に東山古墳群に独特の変遷も読みとることができます。1号墳と2号墳、それから11号墳・13号墳と15号墳では石室の方向がほぼ一致しています。おそらく同時に築かれた古墳で方位をあわせたものと考えられます。そして大型の1号墳と15号墳が敷石をもつものに対し、2号墳と11号墳・13号墳は敷石をもたず排水溝を設けていました。墳丘や石室の規模と床面の状態に一定の約束があることがわかり、きわめて秩序正しく古墳群が形成されたと言えます。



▲ 12号墳の埋葬（復原想定図）





### 副葬品の変化を探る

各古墳から出土した副葬品も7世紀の時代性を物語る資料で、その変化に新しい時代の動きを見ることができました。



▲ 3号墳出土須恵器

### 土器の変化

土器は合子のように蓋と身を合わせる古墳時代タイプの蓋杯から奈良時代に一般的なつまみの付く新式の蓋と杯身のセットへの転換をあとづけることができます。液体を貯蔵する容器も提瓶から平瓶に変化しました。また棒状の工具で暗文と呼ばれる一種の磨きを施した土師器の杯が登場しますが、その背景には都の土器へのあこがれがあったものと推測できます。

▼ 15号墳出土の須恵器・土師器

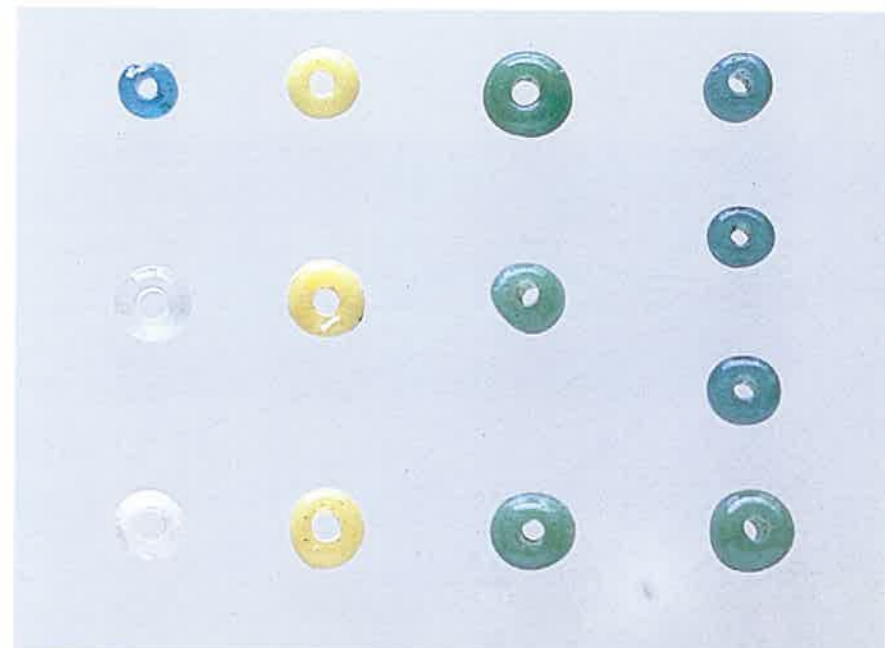


### 装身具の変化

装身具には玉や耳環がありますが、それらにも時代の変化が現れています。ガラス玉は飛鳥時代にはガラスの国産がはじまり、鉛ガラスがアルカリ石灰ガラスにとってかわります。東山古墳群では1号墳でアルカリ石灰ガラス産の玉、15号墳で鉛ガラスの玉、12号墳では両者が出土しており、前者から後者への変化が読みとれました。耳環も流行がめまぐるしく変化しますが、鍍銀から鍍金へ、中実から中空へといった変化を見いだすことができました。



▲ 1号墳の耳環



▲ 1号墳のガラス玉  
(透明の2個は中世のもの)



▲ 1号墳のヒスイ製勾玉



▲ 15号墳の耳環とガラス玉

## 新しい時代への動き

東山古墳群が築かれた時代、世の中は法に基づく政治がおこなわれ始めようとしていました。地方制度では7世紀半ばには評が置かれ、8世紀初めには郡になりました。その長官（郡司）には地元の有力者が任ぜられることが多く、多可郡の場合も東山古墳群の被葬者やその子孫が重職を占めたことと考えられます。というのも郡の役所と見られる思い出遺跡や、郡司が建てた寺である多可寺が東山古墳群から見下ろせる中町北部平野に位置しているからです。

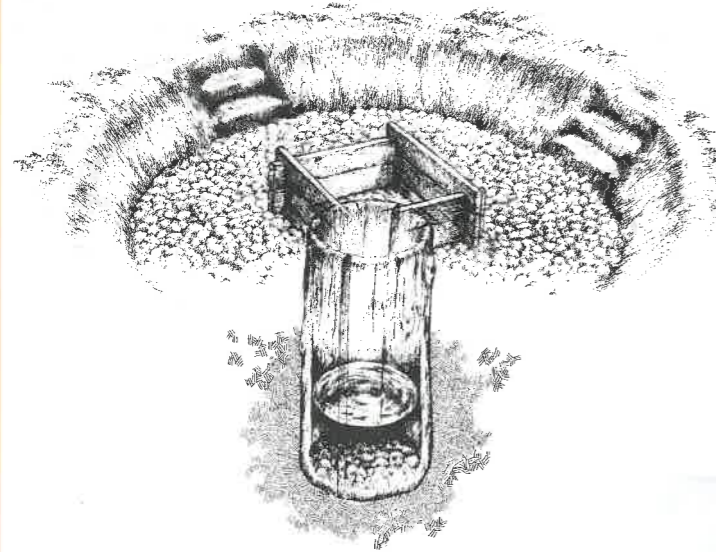


### 中町北部平野を望む

手前の大きな建物が多可高校の校舎で東山古墳群はその右隣り。ほぼ中央の木だちが量興寺境内で多可寺と一致。思い出遺跡はその左手奥になります。

### 思い出遺跡の 割り抜き井戸

思い出遺跡は妙見山南東部に広がる平野部に位置し、町内でも最大級の遺跡と推定されます。この遺跡の第10区調査区では、掘方が約6.2×7m、深さ約3mの巨大な井戸が発見されています。この井戸では径約1mにも及ぶスギの大木を半裁し割り貫いた、丸太割り貫きの、井戸枠が据えられていました。この井戸からの出土した多量の土器、大型の掘立柱建物の存在等から、これらの遺構が古代郡役所を構成する一部と推定されています。



### 多可寺の創建

7世紀後半には、古代寺院の多可寺が建立されます。郡と同じ名をもつ寺院であったことが鎌倉時代の文書から明らかになっています。



### あとがき

東山古墳群に対する発掘調査は、多くの方のご支援を得て、順調に進めることができました。その成果は、単に考古学・歴史学的に重要なばかりでなく、地域の貴重な歴史遺産を知る手引きとしても活用されなければならないと考えています。幸い、この遺跡を史跡公園として整備していく計画が進められており、歴史を身近に体験できる場となる日も遠い先ではないと思います。

さて、この冊子は、より多くの方に東山古墳群を知っていただくために作成いたしました。立派な石室を作り上げた技術にまず感動しますが、詳しく見ていくと、一つ一つの石室に個性があり、それぞれ意味を持っていることが明らかになってきます。それは古墳に込められた古代からのメッセージにほかなりません。その情報を一つずつ拾い出していくことが私たちの努めであり、その作業はまだ道なかばです。この冊子の改訂版を出すくらいの意気込みで、この遺跡についての研究を進めることをお約束して、巻末の辞とさせていただきます。

中町文化財報告21

### 巨大石室墳を掘る

2000年3月25日

発行 中町教育委員会  
〒679-1192 多可郡中町中町123番地  
TEL. (0795) 32-2385  
印刷 ウニスタ印刷株式会社

■データ 紙質 表紙 ハイマツキレーマートポスト 125kg  
本文 ハイマツキレーマートアート 93kg  
文字 モリサワ 新ゴシック 14歳  
写真 スキャナー分解  
表紙 無線トジ